

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：32606  
研究種目：基盤研究(C) (一般)  
研究期間：2018～2022  
課題番号：18K00485  
研究課題名(和文) トランスカルチャー的舞台としての東アジア研究 自己像と亡命者のアジア像を通して  
研究課題名(英文) Transcultural Study at East Asia - Self image and Asian perspective through Exilee from Europe  
研究代表者  
Pekar Thomas (PEKAR, THOMAS)  
学習院大学・文学部・教授  
研究者番号：70337905  
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、テキストや認識の仕方が、異なる文化的影響を通じて特定の文化に当てはまらなくなりトランスカルチャー化していく経緯を、「トランスカルチャー的概念」を用いて明らかにした。(1)1900年前後の東アジアの自己像をめぐる言説(新渡戸稲造や詩人Hans Bethge)と(2)1933～45年に東アジアに亡命したユダヤ系ドイツ人の経験を分析対象とした。上海亡命と亡命者A. J. Storferに関する論文は、米国のアジア・ドイツ研究を代表する研究者との共同プロジェクトにおいて発表され、こうした連携により、ドイツ語圏、英語圏それぞれの研究成果を共有する学問分野としてのAGSに貢献することができた。

#### 研究成果の学術的意義や社会的意義

社会的意義としては、亡命、移民、文化接触をトランスカルチャー概念によって研究することにより、現代の移民をめぐる問題をも深く考察する可能性を見出すことができた。学際的な意義としては、トランスカルチャー概念を、単に都合の良い例を示すだけに留まらない、有用な用語であると証明できた。上海へのユダヤ人亡命が示すように、異なる文化が一つの場所に共存しても、トランスカルチャー理論の意味でのハイブリッド空間が常に生じるとは限らない。また、破壊的なトランスカルチャー性も認められた。第一次世界大戦後のドイツにおける戦争言説は、日本の戦争言説を取り入れ、トランスカルチャー的次元で巨大な力を獲得した。

研究成果の概要(英文)：In this study, it was found, using "transcultural concepts", that the texts and the ways of perceiving become no longer applicable to a specific culture through different cultural influences, and become transcultural. The scopes of analysis were (1) discourses on self-image in East Asia around 1900 (Nitobe Inazo and poet Hans Bethge) and (2) the experiences of Jewish Germans who defected to East Asia in 1933-45. Papers on the Shanghai exile and the exilee A. J. Storfer were published in a joint project with leading researchers in Asian-German studies (AGS) in the US, and this collaboration contributed to the sharing of AGS research results in German-speaking and English-speaking countries.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：トランスカルチャー アジアン・ジャーマン・スタディーズ (AGS) 亡命文学 亡命 移民文学 移民 文化接触 東アジア受容

## 1. 研究開始当初の背景

前科研テーマを通し、ドイツ語圏諸国から東アジアへの亡命者が、どのように故郷の文化的背景と亡命先での経験を結びつけてきたのか、文化接触の観点から研究を進めてきた。これらの研究から、亡命地では複数の文化が接触することにより、「トランスカルチャー的舞台」が生じていたことが明らかになっていった。本研究は、このトランスカルチャー的舞台に焦点を当て、具体例を分析することを主眼とした。

また、日本や欧州とは別に、米国で独自に進められてきたアジア・ドイツ研究は、英語外の原典資料に対して表面的な分析に留まっていた。そうした問題を解決していくため、相互の研究成果を共有し、学問分野「アジア・ジャーマン・スタディーズ (AGS)」として発展させるために、日本や欧州に加えて、米国にて研究成果を発表する必要があった。

そのため、下記の3つの分野での研究が求められていた。

### a) トランスカルチャー概念に基づく分析

トランスカルチャー概念は、文化的出会いの根本にあるダイナミズムや、これらから生じる結果(文学作品など)の特徴を表すものであるが、本研究の枠組みの中で行われた様々な活動を束ねるために、非常に有用な概念であると思われた。トランスカルチャー的状况において、テキストや認識の仕方にどのような変化が生じるのか、すなわち、それらが異なる文化的影響の融合を通じて、ある特定の文化に当てはまらなくなり、トランスカルチャー化していく経緯を、本概念を用いて明らかにする必要がある。

### b) 「トランスカルチャー的舞台」分析

具体例として、ドイツ語圏諸国から東アジアへの亡命によって生じた「トランスカルチャー的舞台」、1900年前後の東アジアの自己像をめぐる言説、1933年から1945年までに日本や中国に亡命したユダヤ系を中心とした亡命者の経験の分析が求められていた。

### c) 米国におけるアジア・ドイツ研究に対する批判と議論

Joanne Miyang Cho (William Paterson University, New Jersey)ら米国でアジア・ドイツ研究を担っている研究者と連携し、米国で年に一度開催されている学会 German Studies Association (GSA) や、学会誌 Palgrave Series in Asian German Studies において、日本や欧州で蓄積されてきた研究業績を踏まえた研究成果を発表する必要があった。

## 2. 研究の目的

以上の背景から、本研究の目的は、トランスカルチャー的舞台に関する資料収集と分析を行い、その成果を国内外にて発表することにある。具体的には、1900年前後の東アジアの自己像をめぐる言説、1933年から1945年までに日本や中国に亡命したユダヤ人亡命者の経験に関して、3つのグループのテキスト：a) 東アジアの著者によって、西欧の言語で書かれた自己像(1900年頃)に関するテキスト、b) 東アジアの自己像が記されたテキストに感銘を受けた、西欧の著者によるテキスト、c) ドイツ語圏からの亡命者が自身の東アジアでの経験などを記したテキストを収集、分析し、その成果をAGSの研究として発表することであった。

## 3. 研究の方法

以上の目的を達するため、資料の収集、分析を行った。本研究では、日記や文学作品といった様々な種類のテキストの分析、解釈、比較が重点となりつつも、並行して、住むことといった文化的行為をも分析するため、研究方法は学際的でなければならなかった。東アジアの自己像に関するテキストは、まず収集、整理されなければならなかった。その後、それらのテキスト間の類似性を明らかにするため分析を行い、あるいは特定の様式要素を明らかにするため、異なる翻訳を相互に比較して分析を行った。全体として、文化的現象と文学的現象の両方を批判的かつ正確に読むことを基本としている点で、文献学的手法であった。

## 4. 研究成果

### a) トランスカルチャー概念に基づく分析

2021年10月にソウル大学ならびに学習院大学主催で開催されたオンライン研究会 Robert Musil - Transcultural Readings において、本概念を用いたムージルの文学作品理解を試み、韓国、中国、日本でのムージル受容について議論を行った。研究会での口頭発表については、共同編集者 Manuel Kraus 氏(早稲田大学)と出版の準備を進めている。

また、トランスカルチャーという用語の複雑さに応じて、文化研究にも取り組んできた。その際、空間組織または空間構成の一例として、「居住すること」を取り上げた。これをめぐる西洋の言説は1900年頃から日本の空間表象に強く影響されてきたからである。さらに、トラン

スカルチャーの特性は、次項に記すように、具体的なテキスト分析において示された。

b) 「トランスカルチャー的の舞台」分析

1900 年前後の東アジアの自己像をめぐる言説

-東アジアの著者によって、西欧の言語で書かれた自己像（1900 年頃）に関するテキスト

これらの西洋言語の言説の中で最も重要なもの（例えば、辜鴻銘、内村鑑三、新渡戸稲造、岡倉覚三、岡倉由三郎によるもの）が収集され、それらの「共鳴」という観点から整理分類された。さらに、新渡戸稲造の著書『武士道』（1900）のような日本の戦争をめぐる言説が、第一次世界大戦後のドイツにおいて、特定の政治的・軍事的目的のために道具化されたことを、トランスカルチャーの否定的な例として明らかにした。

-東アジアの自己像が記されたテキストに感銘を受けた、西欧の著者によるテキスト

1900 年頃からヨーロッパで様々な翻訳が出版されていた日本の詩は、ある特定の日本像を前提と結果として有する「翻案」をもたらすことになった。これについては、詩人 Hans Bethge を例に論じた。

トランスカルチャー的現象と見なされる日本の文献学史は、一方では西欧のゲルマニスト（Karl Florenz）によって定義され、他方では伝統的な国学によって定義されている。これについて基礎的な論文を執筆し、ドイツの重要な学会誌 *Geschichte der Philologien* に掲載された。

1933 年から 1945 年までに日本や中国に亡命したユダヤ人亡命者の経験の分析

歴史的で真にトランスカルチャー的現象は、第二次世界大戦中の東アジア、特に上海へのユダヤ人の亡命であるが、これまでトランスカルチャーという観点からは研究されてこなかった。中国の環境に関わろうとするユダヤ人の移民の試みは、ハイブリッドな「中間空間」が存在しなかったことから、トランスカルチャー的に失敗した試みと見なさなければならない。

上海のドイツ語を話すユダヤ人亡命者は、歴史的、社会的分野で十分に研究されている。しかし、現在、拡大している中国による亡命研究は、国際的な研究に対する挑戦である。将来、この分野で西洋または日本による研究がほとんど行われなくなった場合、中国の政治的な研究が支配的になる危険性がある。

c) 米国におけるアジア・ドイツ研究に対する批判と議論

米国におけるアジア・ドイツ研究を代表する研究者との共同書籍プロジェクトにより、非常に生産的な議論が行うことができた。上海亡命と亡命者 A.J. Storfer に関する論文が歴史家 Joanne Miyang Cho (William Paterson University, NJ) によって出版された本に掲載された。これにより、研究計画で想定されていた米国のアジア・ドイツ研究との連携は実現され、米国外のアジア・ドイツ研究に焦点を当てるといった目標も達成され、本来あるべき学問分野としての AGS に貢献することができた。

今後も、更なる研究活動（例えば、2025 年にオーストリアのグラーツで開催される国際ゲルマニスト学会で「東アジアの言説」をテーマとするセクションの立ち上げる）を通じて、AGS の対象分野、アジア受容と東西接触に関する分析を続ける。

以上の結果から次のよう言える。

- AGS は日本・欧州・米国のこれまでの研究成果を踏まえ、共同して研究することにより、「内部」の拡張をすることができる。他方で、AGS の対象分野が、AGS 以外の研究分野において研究されることも奨励されるべきである。

- トランスカルチャー概念は、「ナイーブ」な意味が取り除かれた（単に都合の良い例を示すだけに留まらない）有用な用語であることが証明された。一つには、トランスカルチャー性は常に機能するとは限らない。つまり、異なる文化が一つの場所に共存しても、トランスカルチャー理論の意味でのハイブリッド空間が常に生じるとは限らない。上海のユダヤ人亡命者は、現在の中国の上海研究がイデオロギー上の理由でそれを異なって提示しているとしても、トランスカルチャー的試みの失敗を示している。もう一つに、破壊的なトランスカルチャー性も認められた。第一次世界大戦後から第二次世界大戦までのドイツにおける戦争をめぐる言説は、そのトランスカルチャー的次元を通じて（日本の戦争言説の要素を取り入れたという点で）巨大な力とダイナミズムを獲得した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計25件（うち査読付論文 18件 / うち国際共著 16件 / うちオープンアクセス 11件）

1. 著者名 Thomas Pekar	4. 巻 2
2. 論文標題 Transiterfahrungen in der Literatur des Exils und der Migration.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Jahrbuch fuer Internationale Germanistik. Wege der Germanistik in transkultureller Perspektive.	6. 最初と最後の頁 339-346
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3726/b20290	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Thomas Pekar	4. 巻 15.28
2. 論文標題 Juedischer Raum in Shanghai waehrend des Zweiten Weltkriegs.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Medaon. Magazin fuer juedisches Leben in Forschung und Bildung	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Thomas Pekar	4. 巻 5
2. 論文標題 Nahrung ohne Bedeutung. Kafkas Sehnsucht.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Avenue. Magazin fuer Wissenskultur	6. 最初と最後の頁 26-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Thomas Pekar	4. 巻 7
2. 論文標題 Psychoanalysis in Chinese Exile. A. J. Storfer and His Magazine Project Gelbe Post	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Palgrave Series in Asian German Studies	6. 最初と最後の頁 319-336
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/978-3-030-73391-9_13	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Thomas Pekar	4. 巻 25
2. 論文標題 Zur Frage der Nietzsche-Editionen und zur nationalsozialistischen Nietzsche-Rezeption.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 GBG [Germanistische Beitrage der Gakushuin Universitaet]	6. 最初と最後の頁 1-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Thomas Pekar	4. 巻 1
2. 論文標題 Ostasiatische Selbstvorstellungsdiskurse um 1900 und ihre deutschsprachigen Resonanztexte.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Einheit in der Vielfalt? Germanistik zwischen Divergenz und Konvergenz. Asiatische Germanistentagung 2019 in Sapporo	6. 最初と最後の頁 289-296
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Thomas Pekar	4. 巻 Vol. 91
2. 論文標題 Thomas Manns Essay Pariser Rechenschaft (1926) als Vorstufe seines Exils	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Vorstufen des Exils / Early Stages of Exile (Amsterdamer Beitrage zur neueren Germanistikシリーズ)	6. 最初と最後の頁 47-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1163/9789004424715_006	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Thomas Pekar	4. 巻 57/58
2. 論文標題 Der Textbegriff der deutschen Philologie im Kulturtransfer nach Japan um 1900 - unter besonderer Beruecksichtigung von Karl Florenz	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Geschichte der Philologien	6. 最初と最後の頁 48-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5771/9783835345195-48	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Thomas Pekar	4. 巻 LII
2. 論文標題 Japanische Kriegsdiskurse und die ideologische Totalisierung des Kriegs im Deutschland der Zwischenkriegszeit	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Jahrbuch fuer Internationale Germanistik LII	6. 最初と最後の頁 165-184
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Thomas Pekar	4. 巻 1
2. 論文標題 Hans Bethge und Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 West-oestliche Wahlverwandtschaften. Hans Bethge und die historischen und aesthetischen Konstellationen um 1900	6. 最初と最後の頁 51-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.36202/9783826072031	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Thomas Pekar	4. 巻 Nr.138
2. 論文標題 Diskussion	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Gefuehlsunordnungen. Heinrich von Kleist und die romantische Oekonomie der Affekte (Studienreihe der Japanischen Gesellschaft fuer Germanistikシリーズ)	6. 最初と最後の頁 87-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Thomas Pekar	4. 巻 Nr.138
2. 論文標題 Das Paradies als paradoxe Strukturformel in Kleist Novelle Das Erdbeben in Chili	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Gefuehlsunordnungen. Heinrich von Kleist und die romantische Oekonomie der Affekte (Studienreihe der Japanischen Gesellschaft fuer Germanistikシリーズ)	6. 最初と最後の頁 25-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Thomas Pekar	4. 巻 Nr.138
2. 論文標題 Einleitung	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Gefuehlsunordnungen. Heinrich von Kleist und die romantische Oekonomie der Affekte (Studienreihe der Japanischen Gesellschaft fuer Germanistikシリーズ)	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Thomas Pekar	4. 巻 24
2. 論文標題 Das juedisch-politische Exil in Asien und Shanghai waehrend des Zweiten Weltkriegs. Ansaetze zu einem Forschungsueberblick	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 GBG [Germanistische Beitrage der Gakushuin Universitaet]	6. 最初と最後の頁 21-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Thomas Pekar	4. 巻 93.1
2. 論文標題 Asian-German Studies and Exile Research	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The German Quarterly	6. 最初と最後の頁 115-117
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Thomas Pekar	4. 巻 267
2. 論文標題 Exilforschung und Asian German Studies. Transnationale Kooperationen in Shanghai	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Jahrbuch fuer Internationale Germanistik LI	6. 最初と最後の頁 165-182
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Thomas Pekar	4. 巻 1
2. 論文標題 Einfuehrung in das Rahmenthema	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Jahrbuch fuer Internationale Germanistik	6. 最初と最後の頁 49-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Thomas Pekar	4. 巻 134
2. 論文標題 Bourdieu's Feldtheorie und die gesellschaftlichen Sprachen der Liebe in Robert Musils Roman "Der Mann ohne Eigenschaften"	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Japanischen Gesellschaft fuer Germanistik	6. 最初と最後の頁 23-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Thomas Pekar	4. 巻 32
2. 論文標題 Hybridisierung und Erotisierung des Mythos. Thomas Manns Romantetralogie "Joseph und seine Brueder"	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Emigration et mythe. L'heritage culturel de l'espace germanique dans l'exil a l'epoque du national-socialisme. Cahiers d'Etudes Germaniques 76	6. 最初と最後の頁 109-119
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Thomas Pekar	4. 巻 -
2. 論文標題 Zum Innenraumdiskurs in Robert Musils Roman "Der Mann ohne Eigenschaften". Transkulturelle Perspektiven im Blick auf Japan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Wohnen und Unterwegssein. Interdisziplinare Perspektiven auf west-oestliche Raumfigurationen	6. 最初と最後の頁 293-313
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Thomas Pekar	4. 巻 -
2. 論文標題 序文	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Wohnen und Unterwegssein. Interdisziplinäre Perspektiven auf west-östliche Raumfigurationen	6. 最初と最後の頁 11-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Thomas Pekar	4. 巻 267
2. 論文標題 Innenräume in Robert Musils "Der Mann ohne Eigenschaften"	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Das Abenteuer des Gewöhnlichen: Alltag in der deutschsprachigen Literatur der Moderne	6. 最初と最後の頁 75-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Thomas Pekar	4. 巻 -
2. 論文標題 Die Psychoanalyse im ostasiatischen Exil. A. J. Storfer und sein Zeitschriftenprojekt "Gelbe Post"	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Exilforschung: Österreich. Leistungen, Defizite und Perspektiven	6. 最初と最後の頁 199-213
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Thomas Pekar	4. 巻 32
2. 論文標題 書評Meron Medzini "Under the Shadow of the Rising Sun: Japan and the Jews during the Holocaust Era"	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Holocaust and Genocide Studies	6. 最初と最後の頁 312-313
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

[学会発表] 計16件(うち招待講演 2件/うち国際学会 14件)

1. 発表者名 Thomas Pekar
2. 発表標題 Transformations of a Space of Exile and Memory: Shanghai - Hongkou - Tilanqiao.
3. 学会等名 Workshop Spatial Relations (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Thomas Pekar
2. 発表標題 Wandlungen eines Exil- und Erinnerungsraumes: Shanghai - Hongkou - Tilanqiao
3. 学会等名 Auf der Flucht vor den Nazis: glueckliches Exil in Asien (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Thomas Pekar
2. 発表標題 Wandlungen des Exil- und Erinnerungsortes Shanghai.
3. 学会等名 Gesellschaft fuer Exilforschung in Kooperation mit dem NS-Dokumentationszentrum Muenchen (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Thomas Pekar
2. 発表標題 Transformations of a Space of Exile and Memory: Shanghai-Hongkou-Tilanqiao
3. 学会等名 書籍プロジェクト・ワークショップSpace in Holocaust Research. A Transdisciplinary Reader (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Thomas Pekar
2. 発表標題 Transiterfahrungen in der Literatur des Exils und der Migration
3. 学会等名 Internationalen Vereinigung fuer Germanistik (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Thomas Pekar
2. 発表標題 Arbeit am politischen Mythos. Thomas Manns Roman-Tetralogie Joseph und seine Brueder und die amerikanische Exilerfahrung
3. 学会等名 Deutsche Thomas Mann-Gesellschaft (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Thomas Pekar
2. 発表標題 Ueber Solimans Schwaerze und die Schwaerze schlechthin
3. 学会等名 Kolloquium: Robert Musil - transkulturelle Lektueren. Internationales Kolloquium zur Musil-Rezeption im asiatisch-pazifischen Raum (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Thomas Pekar
2. 発表標題 Exotismuskritik und inverser Exotismus in Robert Musils Der Mann ohne Eigenschaften
3. 学会等名 Workshop Exotismen in der Kritik (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Thomas Pekar
2. 発表標題 Jewish Living Space in Shanghai and Present Spaces of Memory
3. 学会等名 Web Symposium Going into nowhere? A Jewish Transit Migration and East Asia During WWII (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Thomas Pekar
2. 発表標題 Die Kunst als Fetisch oder: Die Rettung der Würde. Thomas Manns Tod in Venedig im Spannungsfeld von Kulturtheorie und Sozioanalyse.
3. 学会等名 Vortrag beim Workshop, Der Tod in Venedig im Schnittpunkt der Diskurse. Textanalytische Beiträge zur interkulturellen Literaturvermittlung (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Thomas Pekar
2. 発表標題 Ostasiatische Selbstvorstellungsdiskurse (um 1900) und ihre deutschsprachigen Resonanztexte.
3. 学会等名 Vortrag bei der Asiatischen Germanistentagung (AGT) in Sapporo
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 ThomasPekar
2. 発表標題 Research Overview of the Shanghai Exile.
3. 学会等名 Asian Studies Conference Japan (ASCJ), Saitama University (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Thomas Pekar
2. 発表標題 Das Paradies als paradoxe Strukturformel in Kleists Novelle Das Erdbeben in Chili.
3. 学会等名 Vortrag beim Symposium, Gefühlsunordnungen: Heinrich von Kleist und die romantische Ökonomie der Affekte bei der Frühlingstagung 2019 der JGG an der Gakushuin Universität Tokyo
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Thomas Pekar
2. 発表標題 Das literarisch-lyrische Japan-Bild in Deutschland um 1900. Hans Bethge und Japan.
3. 学会等名 Vortrag beim Workshop: Asien-Pazifik. Translokale Verbindungen und imaginaere Besetzungen. Tokyo Universität Komaba (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Thomas Pekar
2. 発表標題 Japanische Kriegsdiskurse und die ideologische Totalisierung des Kriegs in Deutschland in der Zwischenkriegszeit (Nitobe, Haushofer, Ludendorff, Ernst Juenger)
3. 学会等名 Deutsch-Asiatischen Studententag Literaturwissenschaft, Frei Universität Berlin, Humboldt Universität, Mori-Ogai-Gedenkstätte (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Thomas Pekar/ Thomas Schwarz編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Japanische Gesellschaft f. Germanistik	5. 総ページ数 100
3. 書名 Gefuehlsunordnungen. Heinrich von Kleist und die romantische Oekonomie der Affekte (Studienreihe der Japanischen Gesellschaft fuer GermanistikシリーズのNr. 138)	

1. 著者名 Mechthild Duppel-Takayama, Wakiko Kobayashi, Thomas Pekar (Hg.)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 transcript Verlag	5. 総ページ数 434
3. 書名 Wohnen und Unterwegssein. Interdisziplinäre Perspektiven auf west-östliche Raumfigurationen	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<a href="https://thomaspekar.work/">https://thomaspekar.work/</a> <a href="https://robert-musil-asien-kolloquium.com/">https://robert-musil-asien-kolloquium.com/</a> <a href="https://exotismus.wordpress.com/exotismen-in-der-kritik-workshop/">https://exotismus.wordpress.com/exotismen-in-der-kritik-workshop/</a> <a href="https://www.goingintonowhere.com/speakervideos">https://www.goingintonowhere.com/speakervideos</a>
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計3件

国際研究集会 Robert Musil - Transkulturelle Lektüren. Internationales Kolloquium zur Musil-Rezeption im asiatisch-pazifischen Raum	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 Web Symposium Going into nowhere? A Jewish Transit Migration and East Asia During WWII	開催年 2020年～2021年
国際研究集会 Workshop Exotismen in der Kritik	開催年 2021年～2021年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------